

看護学生の感性をくすぐる－共感と自己受容の関連－

東中須 恵子* 田中 里奈* 若林 たけ子*

Tickle sensibility — Empathy and Proprioception in Nursing Students —

Keiko HIGASHINAKASU* Rina TANAKA* Takeko WAKABAYASHI*

*奈良学園大学 保健医療学部 (〒631-8523 奈良県奈良市中登美ヶ丘3丁目15-1)

*NARAGAKUEN University. (3-15-1, Nakatomioka, Nara-shi, Nara, 631-8524, JAPAN)

要旨

本研究は、看護学生の体験から得た感動を共感としてとらえ、それらの特徴と精神看護の主要素のひとつである自己受容との関連を明らかにすることを目的とした。

研究方法は、精神看護学援助論に導入した「自然散策演習課題レポート」の内容分析である。レポートの課題は、①自由に校内を散策しながら感動した事象を発見する、②その感動体験が過去にあったかどうか振り返り、その時期や風景を表現する。③散策後の自分の気持ちを絵画で表現するであった。研究対象はA大学看護学科3年次生78名中、研究に同意した44名であった。課題分析の結果132の回答が得られ、課題ごとの回答結果は、①感動した事象は「植物」「自然を体感」「生活環境」「人」「絵本」であった。②過去の体験と同一体験をした時期は「幼児期」「大学入学前後」「思春期」「その他」であり、表現された言語を分類すると「感情語」、「感覚語」、「思考語」の順で多かった。③クレヨンで創作した気持ちの表現は、「今日の体験が楽しく感動」「あたたかくこころがワクワク」「追及爽快、ワクワク」など、今を肯定的にとらえている表現が多く、植物や青空を描写した作品がほとんどであった。散策による体験学習は自然や植物などを五感でとらえ、これまでの自分の体験を重ね合わせたことで自己の感情を素直に受け入れ自己受容へ発展していることが考えられる。また、過去の体験と五感をとらえて捉えた事象が過去の体験をとらえて強化され、共感へ発展し自己を受け止める自己受容に繋がったと考えられる。

これらの結果から、看護学生の情意領域の教育的な関わりについて考察した。

キーワード： 看護学生、構内散策、感動、自己意識

1. はじめに

看護教育において看護教員は日常的に、「相手の身になって感ずる能力、他の人の必要なものを直感的に把握すること」1)が必要であることを課題として、学生が学修できるようさまざまな教授方法を探求している。感性は「真・善・美・聖などの価値や意味を感じ取る心の感受性である」2)と考えられているが、感ずる能力は感性であり感受性であると解釈できる。感受(後感性)と直感については様々な研究されている。「価値あるものに気づく感覚」3)で、一方、知性と感性を共に育てることについてロジャースは「感情と思考を兼ね備えた人が学修する場が必要である、それは身体があたたかくなるような体験である」4)、と論じており、知性と感性を共に育てることの必要性を述べている。看護を学ぶ学習者が自分の生活や学習のなかで出会うも

のを素直に受け入れ、感動しながら追及していくなかで、特に自己の看護観を高めようとするコンピテンシーに繋がり、情意領域を育てることに繋がると考える。

一方、新しい感性教育論としての感性教育は、教育的には美的教育と深い関係を持つ5) (樋口, 2007) といわれ、哲学的視点においては、環境の変動を察知し、それに対応し、また自己のあり方を創造してゆく、価値にかかわる能力6) (桑子, 2001) とそれぞれの学問的解釈でとらえ感性理解や解釈の曖昧さを示しつつも、価値に関わる能動的で創造的な能力、環境世界と自己の身体の間を把握する能力5)と決定づけられている。また、日本教育の偏差値教育のゆがみを改め、豊かな人間性の教育に立ち返ることのために感性教育が重要である3)、と感性教育の研究成果を報告している論文もあり、体験をとらえた感性教育の必要性についての研究は、義務教育を担う教育者間では多く

行われている。

看護が人間を対象としており、人間関係のうえに成り立っているという考え方に立脚すれば、いまさらながら感性教育を取り上げ探求するものでもないように考える。しかし、人とかかわる専門職である以上、医療技術の提供も人の手で行うのであり、より良い看護の提供は、看護を行う人の人間性が問われ続けていかなければならないのではないかと考える。したがって、看護教育に感性教育の必要性を提唱することは看護学生の情意領域つまり心を育成する上で重要であると考え。しかし、心の看護は心に実体がないため客観性、普遍性、論理性をよりどころとしている近代科学の視点からいえば、教授者側、学ぶ者にとってあいまいな学問と言わざるをえない。そのため、まず看護学生が環境との接点の中で自分をどのように意識して評価するのか明らかにする必要があり、体験から見た自分の感情をありのままに表出させ自己の思考や感情に気がつく教育的関わりは看護教育において意義深い。

人間は環境の中で生きていくけれど、環境のままに流されているわけではない。自分という主体的な自我の働きによって、環境を変容させ新しい環境をつくりながら生きているが、前提として周囲の環境に適応していくことが必要とされる。そのためには、自分の感じている欲求や感情をありのままに認め、環境との葛藤や対立を意味あるものとして受け入れることが重要で、そうした体験や思考が他者を受け入れることに繋がり、まさに情意の発展につながっていくのではないだろうか。

一方、看護教育において情意教育評価に関する先行研究を追ってみると、演習をとおしてさまざまな創意工夫が情意領域の刺激になっている。7) (田中, 1999), 事例を用いた演習の達成を、認知・情意・精神運動領域から検討したところ、情意の達成が高かった。8) (長谷部, 2004) などの報告がある。いずれの報告も、情意に働きかけることで教育の成果が上がったことが報告されている。

これまで筆者は、自然散策や絵本の抄読などが学生のこのころの安寧の体験に繋がり自己を客観視できると考え、教材の創作を試みながら体験演習に導入してきた。これまでの授業終了後の調査から、学生は自分の置かれた状況のなかで自分と現象をとらえ、直観力や創造力を豊かにしているという結果を得た。9)-11) (東中須, 2000, 2011, 2006) これらの結果から、感性を刺激することは『自己発見の喜びやつながりあう喜び』を体験でき生きていく原動力が見出せると考えられる。

今回、情意領域の教育に感性を刺激することをどのように活かしていけばよいのか検討していくための示唆を得たいと考えた。看護学生の体験から得た感動を体験から得た共感としてとらえ、それらの特徴と精神看護の主な要素のひとつである自己受容との関連を明らかにする。また、それらの結果から看護学生の情意教育を高める教育的な

関わりについて考察していく。

*用語の解釈は以下に示す 12)

共感；自分や他者を（物）を新しい関係のなかでとらえなおす

自己受容；自分のこころ（欲求や衝動も含めて、感じ、考えていること）を素直に見つめる。

2. 調査目的

本研究は看護学生の感性と自己受容を調査し、それらの特徴と看護の主な要素のひとつである共感との関連を明らかにすることを目的とする。

3. 調査方法

3.1 調査期間および対象者

2016年4月13日に実施した「精神看護学援助論に導入した演習“自然散策”」の受講者3年次生78名中研究に同意が得られた44名。

3.2 研究対象となる精神看護学援助論の概要

実施期間は3年次前期授業40時間20回中1回90分。実施を以下に示す。

(1) 授業タイムスケジュール(表1)

(2) 演習の実施

1) オリエンテーション内容

①30分校内を自由に散策する

②課題；感動したことを3つ探してくる

③散策中は他者とコミュニケーションしない

④散策後の感想

2) 教室へ帰室後

①帰室した学生ごとに課題レポートを手渡し体験の結果を、課題レポート(表2)に記述するよう指示した

②学生同士で意見交換して個人体験を共有する

③A4用紙を4等分した半紙を1人1枚ずつ渡して、今の気持ちをクレヨンを使って描画するよう指示した

3.3 倫理的配慮

「精神看護学援助論」全授業終了後、出席者全員へ研究依頼書と同意書を配布・説明し協力を依頼した。同意書の回収は、A大学の教務課横に設置された回収箱へ投函とした。同意書の投函をもって同意されたものとし取り扱った。

表1 授業タイムスケジュール

時間	実施内容	実施方法
9:00 ~ 9:10	オリエンテーション	体験学習の目的と方法説明
9:10 ~ 9:40	校内散策	自由散策
9:40 ~ 10:20	課題レポート整理	課題の完成, 体験の共有
10:20 ~ 10:30	まとめ	総括

表2 課題レポート構成

課題	感動したこと (もの)	その理由	体験したことがある場合	
			いつ頃?	場所? 場面?
(1)				
(2)				
(3)				

3.4 分析方法

- (1) 感動したもの (こと) を感動媒体としグループ化した
- (2) その理由に記述された学生の感動を感情表現 (感情語辞典による感情カテゴリー)・感覚表現 (感情表現に含まれる五感), 思考語 (考えや思いを巡らす) に分類した
- (3) 共感できた時期と場所を抽出してグループ化し, テロ, 戦争など人為災害を除き, 地震, 津波, 台風, 洪水, 山火事など自然災害を指す言葉として使用した

4. 結果

4.1 学生の感動したもの (こと)

感動した媒体は, 自然を体感した(42), 日常の生活を振り返った(40), 植物をみた(36), 人を見た(8), 図書館で絵本を見た(6)の順であった(表3)。

自然を体感した複数回答は『鳥のさえずり』『風』『空』『緑の環境』『太陽の光』であった。日常の生活を振り返った複数回答は『校内の備品』『校庭』で, 自然の体感は「タンポポやチューリップ, 菜の花をみた」ことでの感動がほとんどで「桜の新芽」や「桜が葉桜になっている」であった。また, 人を見た, の回答は『校内を歩くクラスメイトの姿』や『清掃してくれる人』であった。また, 図書館を覗いて『はらぺこあおむし』の絵本をみた感動であった。

4.2 感動した理由

学生の表現した感動を感情表現, 感覚表現, 思考表現として取り出しグループ化した。結果, 感情表現 30, 思考表現 19, 感覚表現 18 であった。(表4)

感情表現は, 校内に咲いている花々や読んだことのある絵本に出会い『感動』12, きれいに清掃された教室やグラウンドが整備されていることや屋内から見た空の青さから『きれい』11, 快感 5, 癒し 2 であった。思考語は発見 (新発見), 生命力, 成長, 調和であった。また, 感覚表現は, 春を感じる風や日差しのはかばか, 鳥のさえずりで『季節感』, チューリップをみて『思い出す』4 であった。

4.3 感動体験の振り返り

今回の体験演習で体験した感動が過去にあったかどうか尋ねた結果, 幼児期 43, 大学入学時・現在 19, 思春期 (中学生・高校時代) 6, 無記名 43, 夏, 晴れの日, 毎年 (その他とした) 21 であった(表5)。

4.4 感想

41 の回答が得られた。文章をカテゴリー化しキーワードを抽出した結果, 1) 毎日見ているものが当たり前なものではないことがわかった, 2) 見慣れた

表3 学生の感動した媒体

自然を体感した	42
日常の生活を振り返った	40
植物をみた	36
人を見た	8
図書館で絵本	6

表4 体験後の表現

感情表現	感動	12	}
	きれい	11	
	快感	5	30
	癒し	2	}
思考表現	発見（新発見）	10	
	生命力	6	
	成長	2	
調和	1	}	
感覚表現	季節感		14
	思い出す		4

表5 過去の感動体験の時期

幼児期	43
思春期	6
大学入学時・現在	19
無記名	21
その他（夏・晴れの日、出かけたとき、毎年この時期、4月）	21

5. 考察

近年、看護教育において新卒看護師の看護実践能力が低いことが叫ばれ久しい。各教育機関においては、卒業時の看護実践能力の向上に向け教育内容や教育方法を様々に検討している。目標は、学生自身が自己の教育力を高めるような教育のあり方の研究と成果の追及である。ゴールは、学生の教育力、すなわち学生自身が学修したことを看護実践で発揮できる知識・思考・行動の教授ではないだろうか。そのために、学生自身に経験の積み重ねができるような教育計画が必要であると考え、厚生労働省は、「いかなる状況に対しても、知識、思考、行動というステップ

を踏み最善の看護を提供できる人として成長していく基盤となるような教育」¹³⁾ (2010) について示しており、学習者が新しい行動傾向を獲得できるような工夫の必要性が示唆されている。学習者が新しい行動傾向を獲得できるような工夫が必要である。すなわち、リフレクションの必要性を説いている。Schutzらは「リフレクションは学びに影響を与える経験の探求や自分の感情の分析である」¹⁴⁾ (2013) とし、箕浦は「常に変化する相手や状況を前提に、それらに対応することができる、チームで働く力になる」¹⁵⁾ (2012) と説いている。リフレクションがコンピテンシー実践に反映する機能であると説いている。また、Deweyは「教師が準備し、設計したステップを踏んで学んでいく系統学習ではなく学習を能動的なものと規定し、生徒自身の自発性、関心、能動的な姿勢から、自ら体験的に学んでいく努力の価値を評価する」¹⁶⁾ (2004) ことの必要性を論じている。

学生の自然散策の体験は、清宮のいう「学生の能動的な学習に一步踏み出した授業の方法」¹⁷⁾ (2007) ではないかと考える。学生は、変化のない学内での風景を目的を持ってみることで普段の自分ではなく、状況を変化させて感動したり、考えたり、過去を思い出すことができたのではないだろうか。

人は置かれた状況や関係にふさわしく思慮したり判断したりして、自分の感情をコントロールできなければ望ましい行動ができないと考えられている。よく見て、じっくり聴いたことで、集中力が養われ豊かな表現ができたのではないかと考える。黒田は「周囲のかかわりあうものをしっかり感受し、その知覚・判断とそれに伴う感情のありのままの自己受容ができる」¹⁸⁾ といっている。事象を観察し直感的に捉えた表現が過去体験と重なったことにより、自分を生かしていける媒体として捉えたことが、感情表現となって表出され、媒体に共感した自分のこころを素直にみつめることに繋がったのではないかと考える。こうした学生の体験は、相手の身になって考えるという看護教育の基礎になっていくと考える。

言語学の学問領域において感覚と感情はひとくくりで捉えられる傾向にある。しかし、一般に「感覚」から連想されるのは、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚からなる五感であるといわれ「からだの中からこみあげてくる感覚をどのように扱うべきか」¹⁹⁾ と課題を投げかけている。

看護教育の歴史の中で、看護師は自己の感情を表出することが良い看護師の資質として評価されていなかった時代がある。しかし、朝倉の提言する「感じたことを自らの感性によってふくらませ、いろいろな形で表す…感性を豊かにしていく」²⁰⁾。つまり、感性を豊かにする教育とは、自己の感情をリフレクションしながら相手の立場に立って相手が援助してほしいことを読み取っていくことに繋がる。また、自己の感情を受容できることは直観力を身に

付けていく有効な学修方法であり知ることより重要であると考え。何故なら、学生の学修形態を鑑みると、学習者が能動的に思考し成長することが大事だと論じられていることと、目や耳を澄ませ、学生自らが情報を獲得して考えることができるアクティブシンキングの必要性が報じられてきたからである。

学生が表出した感情語は、学生が媒体を通して共感した自己受容の表現ではないだろうか。自己の、感じる、現す、の繰り返しが他者との関わりの中で共感し自己受容と繋がり、他者に身を置きながら、その感情や考えを感じ理解できたのではないかと考える。このような体験が、自己側のみで感じたり理解したりしたもの比べて、より深いものに発展していったのではないだろうか。

これらの結果から「自然散策」の演習をとおして、美しいものを美しいと感じ、事象によって過去の体験を思い出し感激した体験は、感じとる共感をとおして自己受容に繋がっていると考える。こうしたことから、知識を与えられるという受け身の学習から脱却して、自らが学ぶ価値を見出す、追及していくという指導方法の究明が重要になっていく。また、感じ取るという体験をとおした教育方法は情意領域を育てることに必要であると考え。

<利益相反について>

この研究内容に関する利益相反事項はありません。

文 献

- 1) 高橋照子：シリーズ看護後の原点 人間科学としての看護学序説－看護への現象学的アプローチ。医学書院，181，1991。
- 2) 高橋史朗：感性は自己実現の中核。現代のエスプリ（365）：100-112，1997。
- 3) 片岡徳雄：感性をどう育てるか。現代のエスプリ（365）：92-99，1997。
- 4) C Rogers. A way of Being. 畠瀬稔他（監訳）：人間尊重の心理学。創元社，1993，pp246-272。
- 5) 樋口聡：新しい感性教育論。華東師範大学講演集，2007。
- 6) 桑子敏雄：感性の哲学。NHK ブックス，2001。
- 7) 田中結華，黒江ゆり子，山崎裕美子他：認知・情意・精神運動領域の統合を試みた基礎看護学教育プログラム－人間/人間関係・健康・環境・援助の4要素をふまえて－。大阪市立大学看護短期大学部紀要（1）：43-54，1993
- 8) 長谷部真木子，石井範子，佐々木真紀子他：事例を取り入れた基礎看護技術演習の評価。秋田大学医学部保健学科紀要（1）：18-26，2004。
- 9) 東中須恵子：感性を育てる精神看護学授業の工夫。日本看護学教育学会，2000。
- 10) 東中須恵子：感性を刺激する精神看護学授業の工夫。弘前学院大学紀要（1），91-98，2006。
- 11) 東中須恵子：自然散策の体験による基礎ゼミナールグループの学び。日本保健医療大学紀要（1），13-17，2011。
- 12) 黒田耕誠：力動的人格体制に位置づく感性とその評価。現代のエスプリ：365，126-131，1997。
- 13) Chris Bulman and Sue Schutz: Reflective Practice in Nursing 5th edition 田村由美 池西悦子他訳：看護における反省的実践 原著第5版：看護の科学社 32,2014。
- 14) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書 /www.mhlw.go.jp/stf/houdu/2r9852000001310q-2r9852000001314m
- 15) 箕浦とき子。高橋恵：看護職としての社会人基礎力の育て方。日本看護協会出版社，8，2013。
- 16) Dewey. 福田清次郎訳：思考の方法（How We Think）。春秋社 16-17，1950。
- 17) 清海節子。感覚表現とは何か。駿河台大学論叢 33:31-45，2007。
- 18) 黒田耕誠：力動的人格体制に位置づく感性とその評価。現代のエスプリ：365，126-131，1997。
- 19) 駿河台大学論叢：感覚表現とは何か。39，2007。
- 20) 朝倉淳：感じる・あらかず・共感する－表現活動を活かして感性を豊かにする。現代のエスプリ：365，126-131，1997。

Stimulating sensitivity in nursing students: The relationship between empathy and acceptance

Keiko HIGASHINAKASU* Rina TANAKA* Takeko WAKABAYASHI*

*Faculty of Health Science, NARAGAKUEN University (3-15-1, Nakatomigaoka, Nara-shi, Nara, 631-8524, JAPAN)

Abstract

The purpose of this study was to interpret the emotions that nursing students understand as empathy from their experiences and to clarify how the characteristics of these emotions relate to self-acceptance, as one of the main elements in psychiatric nursing.

The research method was a content analysis of "nature walk exercise task reports" introduced to psychiatric nursing support theory. Tasks in the reports were: 1) discovering emotional phenomena while walking freely within the school; 2) reminiscing if any such emotional experiences occurred in the past and expressing the timings and scenarios of those experiences, and 3) expressing one's own feelings after walking in painted form. Subjects were the 44 of 78 third-year nursing students from University A who consented to participate in this study.

Task analysis produced 132 answers and the answers given for each task were "plants," "physically experiencing nature," living environment," "people," and "picture book" for (1) emotional phenomena. For (2) times when the student had the same experience as in the past, the answers given were "early childhood," "around the time of university enrollment," "adolescence," and "other" when classified by the language of expression, the most common form of expression was "emotional language," followed by "sensory language and "language of thought." For (3) expression of feelings created in crayon, many students expressed positive perceptions of the present, such as "Moved by how enjoyable today's experience was," "The warmth filled my heart with enthusiasm," and "Pursuing refreshment and feeling excited". Most works depicted plants and blue sky.

Experiential learning through walking is thought to allow the individual to honestly accept their own emotions and develop self-acceptance by perceiving nature plants, and other phenomena with the five senses and superimposing these onto their own experiences to date. Furthermore, past experiences and phenomena perceived using the five senses were enhanced in the subjects of this study through past experiences, and thereby led to the development of empathy and, eventually, to self-acceptance. The educational involvement of the affective domain in nursing students is discussed based on these results.

Key Word : Nursing Students, Walking Freely within the School, Emotional Experience, Self-acceptance